

戦後短篇小説再発見

青春の 光と影

1

講談社文芸文庫 編

講談社文芸文庫
Kodansha Bungei bunko



戦後短篇小説再発見 1

青春の光と影

kōdansha bungeibunko

講談社文芸文庫 編

講談社



文芸文庫

せんごたんぺんしょうせつさいはつけん
戦後短篇小説再発見 1 せいしゅん ひかり かげ
こうだんしやぶんげいぶんこ へん
青春の光と影

講談社文芸文庫編

©Kodansha bungeibunko 2001

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

二〇〇一年六月一日第一刷発行 二〇〇一年八月七日第三刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2・12・21 〒112-8001

電話 編集部 (03) 5395・3513

販売部 (03) 5395・3626

業務部 (03) 5395・3615

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は、小社書籍業務部宛にお送りください。

送料は小社負担にてお取替えます。

なお、この本の内容についてのお問い合わせは

文芸文庫出版部宛にお願いいたします。（庫文）



ISBN4-06-198261-3

目次

眉山	太宰 治	九
完全な遊戯	石原慎太郎	二五
後退青年研究所	大江健三郎	六七
雨のなかの噴水	三島由紀夫	八
相良油田	小川国夫	一〇二
バス停	丸山健二	一二三
入江を越えて	中沢けい	一四三
昔みたい	田中康夫	一七四
暑い道	宮本 輝	一九三

神河内

北 杜夫 二四

水の色

金井美恵子 二七

解説

川村 湊 二五

著者紹介

二六

戦後短篇小説再発見 1

青春の光と影

kōdansha bungeibunko

講談社文芸文庫 編

講談社



文芸文庫

序

日本の近代文学のなかで、短篇小説は特別な位置を保ってきた。それは短いだけの「小説」ということではなかった。人生を切り口鮮やかに一瞬のうちに示してみせる言葉の技術。一人の人間のその複雑な内的世界を丸ごと描いてみせる文章の技量。日本の短篇小説の作家たちは、人間や社会や歴史を、そのままの全体として描き出すのではなく、鏡に映った小さな宇宙として描き出したのである。

しかし、それは単に小さなものへの偏愛や、短いものへの愛好だけではなかった。言葉の世界が持つ可能性としてのミクロコスモス、小さな言葉の奥にある無限大の広がりへの信頼が、短歌や俳句の文学的伝統を持つ日本の文学者（小説家）たちに、強固に保持されていたからである。

「戦後」はすでに半世紀を閲^{けみ}した。私たちはこの間、他国や他地域の戦争や革命や動乱や崩壊を目の当たりにし、焼け跡・闇市からの経済復興と、高度成長と、バブル景気と、その失墜とを体験した。だが、何よりも私たちが痛切に体験したのは、変化・変貌する社会のなかで、家族や友人、知人との人間関係がこれまでの堅固さ（それは幻想だったが）を失い、個人として社会に浮遊するという、寄る辺なき「生」を生きることの孤独だった。

そして、この孤独感、孤立感を発条として、人とつながろうとする精神、支え合おうとする意志が、言葉によるミクロコスモス、多くの短篇小説を生み出したのである。

私たちは「戦後」という時代に書かれた膨大な数の短篇小説のなかから、一人の小説家について一作のみを収録するという原則で、さらにこれまであまり知られることのなかった「名作」を選び出すという作業を行った。長さも四百字詰原稿用紙で六十枚程度を目安とするという厳しい条件を設けた。

「青春」「恋愛」「性」「生と死」「故郷と異郷」「政治」「戦争・歴史」「家族」「都市」「表現の冒険」というテーマ別編集は、戦後短篇小説の豊饒な世界へのそれぞれの入り口にかすぎない。どの入り口から入っても、読者は戦後短篇小説の魅惑と感動と感銘とを味わうことができるだろう。

私たちはここで百十七の「小宇宙」を提示する。これらが「戦後」が生み出したもっとも鮮烈で、もっとも崇高な魂の形であることを疑わない。

二〇〇一年四月二十日

井口時男

川村 湊

清水良典

富岡幸一郎

目次

眉山	太宰 治	九
完全な遊戯	石原慎太郎	二五
後退青年研究所	大江健三郎	六七
雨のなかの噴水	三島由紀夫	八
相良油田	小川国夫	一〇二
バス停	丸山健二	一三
入江を越えて	中沢けい	一四三
昔みたい	田中康夫	一四四
暑い道	宮本 輝	一五三

神河内

北 杜夫 二四

水の色

金井美恵子 二七

解説

川村 湊 二五

著者紹介

二六

戦後短篇小説再発見

1

青春の光と影

眉山^{びざん}

太宰 治

これは、れいの飲食店閉鎖の命令が、未だ発せられない前のお話である。

新宿辺も、こんどの戦火で、ずいぶん焼けたけれども、それこそ、ごたぶんにもれず最も早く復興したのは、飲み食いをする家であった。帝都座の裏の若松屋という、バラックではないが急ごしらえの二階建の家も、その一つであった。

「若松屋も、眉山がいなけりやいいんだけど。」

「イグザクトリイ。あいつは、うるさい。フウルというものだ。」

そう言いながらも僕^{ぼく}たちは、三日に一度はその若松屋に行き、その二階の六畳で、ぶっ倒れるまで飲み、そうして遂^{つい}に雑魚寝^{ざこね}という事になる。僕たちはその家では、特別にわがままが利^きいた。何もお金を持たずに行つて、後払いという自由も出来た。その理由を簡単に言えば、三鷹^{みたか}の僕の家のすぐ近くに、やはり若松屋というさかなやがあつて、その

おやじが昔から僕と飲み友達でもあり、また僕の家の方たちとも親しくして、そういったのでござんなさい、私の姉が新宿に新しく店を出しました。以前は築地^{つきじ}でやっていましたね。あなたの事は、まえから姉に言っていたのです。泊って来たってかまやしません。」

僕はすぐに出かけ、酔っぱらって、そうして、泊った。姉というのはもう、初老のあつさりしたおかみさんだった。

何せ、借りが利くので重宝^{ちようほう}だった。僕は客をもてなすのに、たいていそこへ案内した。僕のところへ来る客は、自分もまあこれでも、小説家の端くれなので、小説家が多くなければならぬ筈^{はず}なのに、画家や音楽家の来訪はあっても、小説家は少かった。いや、ほとんど無いと言っても過言ではない状態であった。けれども、新宿の若松屋のおかみさんは、僕の連れて行く客は、全部みな小説家であると独り合点している様子で、殊^{こと}にも、その家の女中さんのトシちゃんは、幼少^{こうしょう}の頃より、小説というものがメシよりも好きだったのだそうで、僕がその家の二階に客を案内するともう、こちら、どなた？ と好奇の眼をかがやかして僕に尋ねる。

「林芙美子^{ふみこ}さんだ。」

それは僕より五つも年上の頭の禿^はげた洋画家であった。

「あら、だって、……」

小説というものがメシよりも好きと法螺ほらを吹いているトシちゃんは、ひどく狼狽ろうばいして、

「林先生って、男の方なの？」

「そうだ。高浜虚子きよこというおじいさんもいるし、川端竜子かわばたりゆうこという口髭くちひげをはやした立派な紳士もいる。」

「みんな小説家？」

「まあ、そうだ。」

それ以来、その洋画家は、新宿の若松屋に於おいては、林先生という事になった。本当は二科の橋田新一郎氏であつた。

いちど僕は、ピアニストの川上六郎氏を、若松屋のその二階に案内した事があつた。僕が下の御不浄に降りて行ったら、トシちゃんが、お銚子ちようしを持って階段の上り口に立っていて、

「あのかた、どなた？」

「うるさいなあ。誰だれだつていいじゃないか。」

僕も、さすがに閉口していた。

「ね、どなた？」

「川上っていうんだよ。」

もはや向つ腹が立って来て、いつもの冗談も言いたく無く、つい本当の事を言った。

「ああ、わかった。川上眉山。」

滑稽こっけいというよりは、彼女のあまりの無智むちにうんざりして、ぶん殴なぐりたいような気にさえなり、

「馬鹿野郎！」

と言つてやった。

それ以来、僕たちは、面と向えば彼女をトシちゃんと呼んでいたが、かげでは、眉山と呼ぶようになった。そうしてまた、若松屋の事を眉山軒などと呼ぶ人も出て来た。

眉山の年齢は、はたち前後とでもいうようなところで、その風采ふうさいは、背が低くて色が黒く、顔はひらべったく眼が細く、一つとしていいところが無かったけれども、眉まゆだけは、ほっそりした三ヶ月型で美しく、そのためにもまた、眉山という彼女のあだ名は、ぴったりにしている感じであった。

けれども、その無智と図々ずうずうしさと騒がしきには、我慢できないものがあつた。下にお客があつても、彼女は僕たちの二階のほうにばかり来ていて、そうして、何も知らんくせに自信たつぷりの顔つきで僕たちの話の中に割り込む。たとえば、こんな事もあつた。

「でも、基本的人権というのは、……」

と、誰かが言いかけると、

「え？」